

# 農林水産大臣賞受賞

やけもり  
焼森山麓に妖精の杜 いい里ありて集う郷

きょうぎかい  
受賞者 さかがわ協議会

はがぐんもてぎまち  
(栃木県芳賀郡茂木町)

## ■ 地域の沿革と概要

茂木町は栃木県の南東部、茨城県との県境をなす八溝山系の山間地域に位置する総面積 172.69 k<sup>2</sup> の町であり、地形は南北に細長く、北部から南東部にかけて清流那珂川が、また、南部からは逆川が流れ那珂川に合流している。

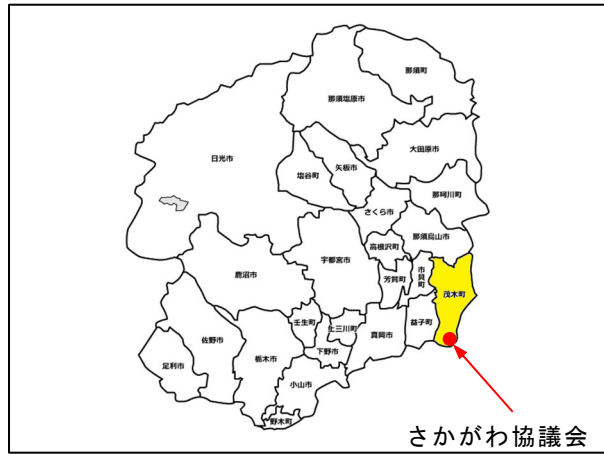
町の約6割が山林で傾斜地の多い典型的な中山間地域で、農業経営の主要作物は水稲であり、現在、いちごやにら等の高収益作物の導入を推進しており、新たな産地を形成している。

また、「日本の棚田百選」にも認定されている「石畑の棚田」など、中山間地ならではの棚田や里山が多く、棚田オーナー制度をはじめとした集落等単位のむらづくりの取組も多く見られる。

人口は11,656人（令和3年2月1日現在）で、年間交流人口は「ツインリンクもてぎ」等の観光施設により、約306万人（令和元年度）に及んでいる。

逆川地区は町の南部に位置しており、西は益子町、南は茨城県桜川市と笠間市、東は茨城県城里町に接

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事項	内容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団等
農家率 (内訳)	36.5% 総世帯数 4,572戸 総農家数 1,670戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 259戸 1種兼業農家 69戸 2種兼業農家 664戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 17,269ha 耕地面積 1,910ha 田 1,080ha 畑 831ha 耕地率 11.1% 農家一戸当たり耕地面積 1.1ha

注：茂木町の数値（H27）  
専業別農家数は販売農家数の内数のため、総農家数と一致しない。

している。約 20 集落から構成され、4 つの旧小学校区がある。

約 75% を森林が占めており、周囲は<sup>やけもりやま</sup>焼森山、<sup>けいそくさん</sup>鷄足山、<sup>ぶつちようざん</sup>仏頂山、<sup>たかみねやま</sup>高峯山、<sup>あままさきさん</sup>雨巻山などの山々に囲まれて、100 年ほど前から「<sup>けいそくさん</sup>恵澤浴著」の精神のもと、子孫繁栄を願い住民一丸となって焼森山等で森づくりを続け、「全国の模範：逆川村」として天皇より賞詞も賜った歴史がある。

東京都心から 100 k m 圏内にあり、北関東自動車道へのアクセスも良く、宇都宮市と水戸市をつなぐ要所にもなっている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

さかがわ協議会は、茂木町南部の中山間地域において、農産物直売所、農村レストラン、農産物加工所の複合施設「いい里さかがわ館」を拠点として、地元農産物等を活用した特産品づくりや加工・販売、地域資源ミツマタの活用による誘客など、所得の向上や就労機会の創出につながる様々な取組を展開している。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

茂木町逆川地区は、昔から「恵澤浴著の精神」のもと、住民全体による近隣焼森山の森づくりが実施されていたほか、若手住民で構成される「元気アップ逆川会」により地区を活性化するための会議を開催する等、団結力のある地域である。

平成 9 年以降、町中央部では、「道の駅もてぎ」や「ツインリンクもてぎ」がオープンし、交流人口が年々増加していたが、南部の逆川地区では、26 店舗あった商店が 8 店舗にまで激減するなど、過疎化が深刻化していた。

このような状況下、若手住民の「逆川地区に地域拠点を作っていい里にしたい」という声が町を動かし、「茂木町南部文化圏整備構想計画検討委員会」が設置され、地域活性化について本格的に検討していくことになった。

その後、平成 18 年に農家・非農家併せて 70 名による「さかがわ協議会」を設立、平成 20 年には農産物直売所、農村レストラン、農産物加工所の複合施設「いい里さかがわ館」の管理運営を受託、現在では、地元農産物等を活用した特産品づくり



写真 1 いい里さかがわ館

や加工・販売、地域資源ミツマタの活用による誘客等、所得向上や就労機会創出につながる様々な取組を展開している。

## (2) むらづくりの推進体制

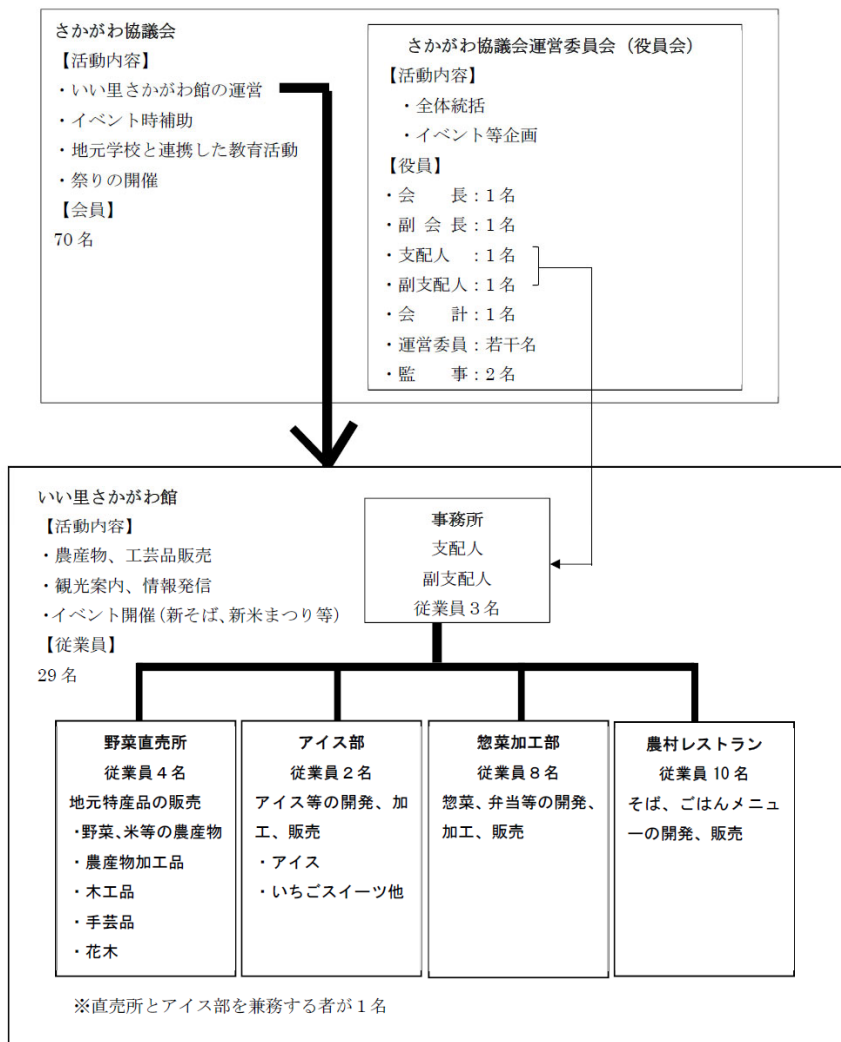
さかがわ協議会は会員数 70 名で構成され、各種活動を検討するための運営委員会を組織するとともに、地元観光施設や商工事業者、高校とも連携するなど他の組織とも連携強化を図っている。

- ・ さかがわ協議会 会員数：70 名（男 55 名、女 15 名）
- ・ 運営委員会 委員数：15 名（男 13 名、女 2 名）
- ・ いい里さかがわ館の従業員数：29 名（男 8 名、女 21 名）



写真 2 運営委員会

第 2 図 組織体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

さかがわ協議会が活動する逆川地区は、日本の原風景とも言える山あいの田園風景が広がる魅力ある農村地域であるが、高齢化、過疎化など多くの課題に直面している。

協議会では、住民アンケートや地元説明会等を通して、地域の課題や住民のニーズを把握し、その意見を積極的に取り入れることで、住民が地区の課題を自分事と考え、自主的に参加する環境を整えた上で、活動拠点となる「いい里さかがわ館」の運営に当たっている。

農業生産面については、直売所に出荷する生産者への作付け指導や特別栽培米の推進、地元農産物を積極的に取り入れた商品の開発促進などにより、農家所得の向上や耕作放棄地の解消に貢献している。

また、埋もれていた地域資源を長年かけて一流の観光資源に磨きあげ、様々な組織との連携を図ることで、交流人口を飛躍的に増加させるなど、地域振興に大きく寄与するとともに、「いい里さかがわ館」と首都圏を結ぶ交通アクセスが新たに整備されるなど、活動の成果は地区内のみならず、町全体に広がりを見せている。

さらには、近隣施設と連携した地域周遊システムを実現するための法人設立に携わるなど、協議会は逆川地区全体を盛り上げる自立的かつ継続的な活動を実践している。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) そばの全量買い上げ

協議会では高齢化問題・耕作放棄地の問題にも取り組むため、高齢者でも比較的負担が少なく生産可能な「そば」の作付けを推進しており、全量を毎年一定の価格で買い取ることにしたことで、安定した収入を確保できる安心感から生産者の耕作意欲が向上し、そばの作付面積は3haから10haへと増加した。



写真3 そばを使用したメニュー

#### (2) 農産物の周年安定供給への取組

協議会では、JAはが野や町などと連携して約100名の直売所出荷者に対して、生産品目や生産量、時期についてアドバイスを行っている。オープン当初は直売所に同一野菜が集中して売れ残ってしまったり、極端な端境期が年4回もあつたり、農産物販売のムラが大きかった。

このため、生産者ごとの得意分野を見つけて別の作目の栽培を推進したり、端境期が生じないように時期をずらした栽培についてアドバイスするなど、生産者の所得向上を意識した取り組みを行った結果、現在では、周年供給体制が構築されたことで、来館者の信頼も向上し、毎年売上額が伸びている一因となっている。

こうした取組に加え、そばの全量買い上げの取組の結果、いい里さかがわ館オープン当時と比較して、生産者1人あたりの所得が50万～100万円増加するなど、生産者の所得向上に寄与している。

また、平成30年、令和元年は、いい里さかがわ館のすべての従業員に賞与を支給するなど、地域経済の活性化にもつながっている。

### (3) 新規導入作物の推進

協議会では、町と連携して耕作放棄地解消の一環として、加工品の需要拡大が見込めることから、近年エゴマの栽培を推進しており、栽培したエゴマを使った商品を、いい里さかがわ館で販売したところ、お客さんからも好評である。

また、近年、いちごの栽培面積が増加し、いい里さかがわ館でもいちごを販売するほか、地元産いちごを使用したジェラートや甘酒などの新商品開発を行い、消費拡大を支援するなどいちご栽培を推進している。

### (4) ブランド米の生産の組織化

逆川地区の米は昼夜の寒暖差と山間の清流で作られ、食味値が高く、「冷めてもおいしいさかがわのお米」として地元の自慢である。

平成24年には米・食味分析鑑定コンクール国際大会において、特別優秀賞を受賞した実績を持っている。

現在でもブランド力向上に向け、米生産者で「さかがわ特別栽培米研究委員会」が結成され、品質向上のための研究や勉強会などが行われているとともに、協議会では、さらに付加価値を付けて販売するため、特別栽培米を推進している。



写真4 お米選手権特別優秀賞受賞

### (5) 女性の力による新商品開発及び販売力強化

女性たちのアイデアで地元産の食材を使った多くの人気商品が誕生し、その中でも大人気なのが、「さかがわの昼めし」、「そばどろぼう」、

「大根のしょう油漬け」である。

特に、「さかがわの昼めし」は、東日本大震災後の風評被害からいい里さかがわ館が回復する契機となった、女性従業員のこだわりが詰まったお弁当であり、女性従業員の取組が評価され、平成 30 年度栃木県主催の「とちぎ地産地消夢大賞」で優秀賞を受賞している。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 焼森山の登山道整備

地元住民は、協議会設立協議と並行して都市住民の誘客も検討し、地元を誇る焼森山に注目したものの、当時、外部の人間にはほとんど知られていなかったため、観光資源化を目指し、焼森山の登山道整備を開始した。



写真 5 ミツマタ群生地遊歩道整備

平成 18 年頃、茂木中学校新築

工事のため、焼森山を含む公有林で木の切り出しが行われると、雑木の中に埋もれていたミツマタが増殖し、群生地が形成されているのを登山道整備の中で発見した。

協議会は、ミツマタ群生地を地域資源として活用しようと、登山道整備に加えて、ミツマタ群生地付近の倒木の除去や下草刈りなどを行い、平成 23 年に遊歩道の整備を始めた。

#### (2) ミツマタを活用した交流人口増加に向けた環境整備

協議会は、ミツマタ群生地を、「焼森山は逆川地区の魅力のひとつだ」との思いから、約 10 年の歳月をかけて焼森山周辺の整備と P R を地道に続けた結果、平成 27 年に新聞をはじめ多くの情報媒体でミツマタ群生地が紹介されたことを皮切りに、新たな観光スポットとしての賑わいを得ることとなった。

平成 29 年からは、J R 6 社主催のディスプレイネーションキャンペーンのポスターに選ばれたことをきっかけに、J R 宇都宮駅や真岡鐵道茂木駅からいい里さかがわ館を結ぶ「ミツマタ特急バス」、いい里さかがわ館とミツマタ群生地を結ぶシャトルバスが運行されることとなった。

現在では、茨城交通（株）と連携した県内外への P R 活動、ミツマタハイキングツアーを開催するなどして、積極的に都市住民との交流を行っており、これらの取組の結果、年間 1 万人以上の交流人口を新たに創出することができた。

### (3) 地域女性の雇用と女性店長の育成

いい里さかがわ館従業員 29 名のうち、女性従業員は 21 名と、その割合は 7 割を占めており、接客、惣菜等の商品開発や調理などに従事しているほか、箸置きにカバーを付けて衛生的にするなどの提案を行い、職場環境改善に活躍している。



写真6 各部門の女性店長

また、働くことを通して地域内外の人との交流が生まれたり、職場にも仲間ができるなどより良い人間関係を築くことができている。

直売所出荷者の約 4 割が女性であり、女性生産者の確保・育成にも寄与している。

いい里さかがわ館には直売所、農村レストラン、惣菜加工部、アイス部があり、全ての部門で女性が店長を務め、施設運営や商品開発の権限や責任が与えられており、毎月 1 回店長会を開催し、目標設定等の協議や、接客及び販売についての勉強会等を行うなど、女性店長の育成も行っている。